

新教皇誕生（604号）

2025年 5月 石館

ローマ教皇庁（バチカン）は8日の教皇選挙会（コンクラーベ）で新たなローマ教皇に米国出身のロバート・フランシス・ブレポスト枢機卿（69）を選出したと発表した。米国出身の教皇は初めて。教皇名は“レオ14世”を選んだ。小生は



新教皇は「レオ14世」 アメリカ出身のブレポスト枢機卿 - BBC ...

若い頃2回バチカンに行ったことはあるが、宗教のことには疎いので、カトリックについても受け売りであることをお許しいただきたい。

レオ14世は267代目の教皇となる。コンクラーベの投票で、3分の2を超える票を得た。

就任式は18日に実施される予定で、世界の宗教指導者や政治家が参加するミサが行われる。

今回のコンクラーベは前教皇フランシスコが5月に死去したのを受け、5月7日に始まった。多数の候補者の名前が挙がる中、本命視されていなかったレオ14世を教皇に押し上げた背景には、バチカン教皇庁内の力学の変化がある。

コンクラーベは外部との接触を遮断した密室で投票が行われ、世界中から集まった枢機卿133名（133票）のうち105票を獲得したことが11日分かった。バチカン情報筋が秘密投票の内幕を明らかにした。本来公表されない票数が明らかになるのは極めて珍しい。

前教皇の側近だったイタリア出身のバロリン枢機卿や、保守派のハンガリー出身のエルドー枢機卿らが有力候補とされたが、8日行われた4回目の投票で、選出に必要な3分の2以上の票（89票）を大きく上回ったブレポスト氏が選ばれた。ブレポスト枢機卿はアメリカ出身の69歳。アメリカ出身の教皇が誕生するのは初めてである。

プレポスト氏は、司教の選出を担当するバチカン司教省長官に任命され、フランシスコ前教皇によって枢機卿に任命された。プレポスト氏はフランシスコ前教皇から信頼を置かれていたとされ、貧しい人々や移民に寄り添ってきたことで知られている。事前の予想を覆してレオ14世が選出された背景には、南米ペルーで長く宣教師や司教を務めた経験が大きい。南北アメリカ大陸には世界の

戦後の歴代ローマ教皇

代	教皇名	()は在位、出身国
260代	ピウス12世	(1939~58年、イタリア)
261代	ヨハネ23世	(58~63年、イタリア)
262代	パウロ6世	(63~78年、イタリア)
263代	ヨハネ・パウロ1世	(78年、イタリア)
264代	ヨハネ・パウロ2世	(78~2005年、ポーランド)
265代	ベネディクト16世	(05~13年、ドイツ)
266代	フランシスコ	(13~25年、アルゼンチン)
267代	レオ14世	(25年~、米国)

カトリック教徒の5割近くがいるとされ、そのうち南米が27%を占める。

南米と北米を繋ぐ候補として、支持を固めたとみられる。アルゼンチン出身で中南米から初めて教皇となったフランシスコに続き、バチカンを動かす新興国の発言力を見せつけた。

教皇の座を独占してきた欧州の存在感は薄れてきている。前述のイタリア出身のバロリン國務長官などが有力候補として取りざたされたが、選出に必要な票を確保できなかった。“協会離れ”が広がって信者が減るにつれ、欧州出身の枢機卿の人数も減少基調にある。

フランシスコは協会の欧州中心主義からの脱却を訴え、新興国から多くの枢機卿を登用した。今回のコンクラーベに参加した枢機卿の出身国は70か国となり、フランシスコが選出された2013年の48か国に比べて大きく増えた。



カトリックの一本集権制

レオ14世はペルーで貧しい人々や移民に寄り添う活動を続け、フランシスコの目に留まった。23年に枢機卿に引き上げられ、司教の選出を担当するバチカンの司教省長官の要職を任された。異なる宗教への寛容さや対話を訴えるフランシスコの路線を継承する公算が大きい。

枢機卿は世界中の司教の中から教皇が任命し、任期は設けられていない。現在、世界94カ国252人の枢機卿がいて、そのうち80歳未満の135人が新しい

教皇を選ぶ“コンクラーベ”で投票する権利を持っている。135人のうち地域別ではヨーロッパが53人と最も多い、次いでアジアが23人、アフリカが18人となっている。

ちょっと古いデータであるが世界の人口の中でキリスト教が22億人、30%を超え、最も信者の多い宗教である。

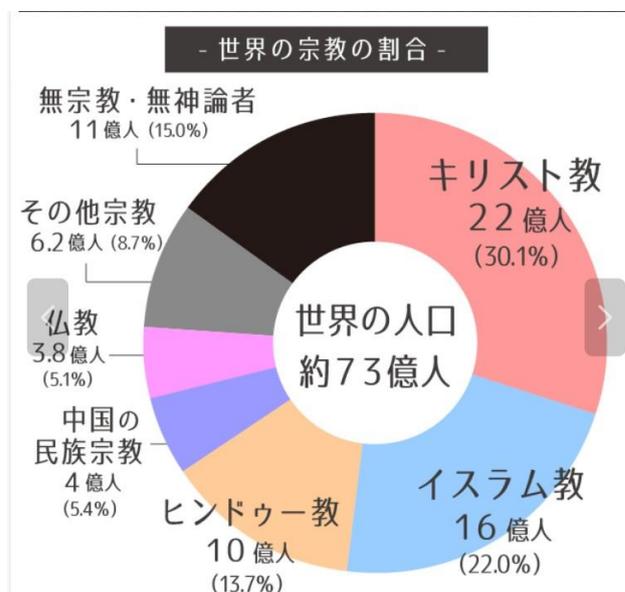
キリスト教にはいくつかの宗派があるが、その中でもカトリック、プロテスタント、正教会が3大派と言われる。

その中でカトリックは13億人おると言われ、キリスト教の最大派である。プロテスタント約8億人、正教会約2億2500万人。

カトリックの大きな特徴を2つ挙げるとすれば“一本集権制”と“伝統性”である。プロテスタントが多くの教派を持つのに対し、カトリックは一つしか教派がない“一本集権制”という形をとっており、ローマ教皇を頂点としたピラミット型で成り立っている。カトリックは“伝統性”を大切にして、優先順位は神>教会>聖書である。

そのため、儀式や教会組織などの伝統を重んじることから、教会を信仰のシンボルとし、見た目豪華な教会が多い。カトリックは信仰に加えて善行によって救われると考えている。そのため昔から修道士や修道女は伝染の危険も顧みず病人の世話をしたり、貧しい人々に施しを与えたり、自らの人生を人々に尽くしている。

一方プロテスタントの特徴を2つ挙げるなら“千差万別”と“聖書主義”と言える。プロテスタントには多くの教派があり、その様相は千差万別である。しかし聖書



主義を掲げ、根本的な考え方は皆同じで、聖書を中心としておる。つまり、プロテスタントの優先順位は**神>聖書>教会**である。プロテスタントは、神の前では信徒全員平等と考え、階級制はない。カトリックでは集会のことを“ミサ”と呼び、プロテスタントでは“礼拝”と呼ぶ。

教会全体の見た目や内装には明らかな差がある。カトリックでは豪華でプロテスタントは質素であるが、これはプロテスタントが貧乏だからというわけではなく、教会をどれだけ重視しているかという考え方の違いである。



教皇が決まったことを示す白煙

フランシスコ前教皇は、教会の欧州中心主義からの脱却を唱え、新興国から多くの枢機卿を登用した。

フランシスコが進めた同性愛や離婚などを巡る改革をうけ、教会内ではリベラル派と保守派の対立が深まった。レオ14世はこれらの改革には一定の距離を保ち、穏健な立場を維持した。バランス重視の価値観で、保守派の支持を繋ぎとめた。

今後教会の厳しい財政にも直面することになる。信者からの寄付金の減少などで財政赤字が膨らむ中、財政の健全化をどう維持するかが問われる。レオ14世はトランプ米政権の移民政策を度々批判してきた。バチカンにとって最大の支援国の一つである米国との関係がこじれれば、財政問題にもつながりかねない。

世界に約13億人の信者を抱え、一宗教を超える影響力を持つローマ・カトリック教会のトップとなった新教皇を待ち受ける課題は山積している。特に新教皇に期待されるのは、紛争に引き裂かれた現代の世界で、平和や人権擁護のために宗派を超えた影響力を発揮することであろう。

